

第3回渡良瀬遊水地エリア検討部会 議事要旨

【概 要】

日 時	平成 29 年 3 月 9 日（木） 14：00～16：00
場 所	栃木市藤岡遊水池会館 2 階大会議室
議 事	(1) 前回会議の意見について (2) エリア内で現在進行中の取組み事例について (3) エリア内で展開するテーマプロジェクト（案）について (4) 多様な主体の連携による取組みの先行的事例について (5) 今後の展開・進め方（案）について
配布資料	1. 議事次第 2. 出席者名簿 3. 出席者席配置図 4. 検討部会規約・名簿 5. 資料 1：前回会議の意見 6. 資料 2：エリア内で現在進行中の取組み事例について 7. 資料 3：エリア内で展開するテーマプロジェクト（案）について 8. 資料 4：多様な主体の連携による取組みの先行的事例について 9. 資料 5：今後の展開・進め方（案） 10. 参考資料 1：エリア内で現在進行中のプログラムおよび連携主体（候補）について 11. 参考資料 2：渡良瀬遊水地エリアの現状と課題への対応について 12. 参考資料 3：第 2 回渡良瀬遊水地エリア検討部会議事要旨
出 席 者	【第 3 回渡良瀬遊水地エリア検討部会 配付資料「出席者名簿」のとおり】
会議風景	

【内 容】（敬称略）

■開会

（事務局）開会の宣言

■あいさつ

（議 長）渡良瀬遊水地ではセイタカアワダチソウも元気だが、在来種も 3 月に入って既に活動

を始めている。中旬にはヨシ焼きもあるので春本番に入ろうとしている。今回は全市町の皆様のご出席を頂いている。資料も前回会議の意見を踏まえたものを用意してもらっている。その中で大事なポイントがいくつかある。1つは、14 県・市町が参加しており、それらの取組みを取り込んでもらっていること。つまり、遊水地を中心にして、周囲に広がっていくイメージを持っている会議であること。さらに、国交省、農水省、環境省、民間団体等、参加主体にも広がりを持っている。そういう意味で大事なのは他にもエリアがある中で渡良瀬遊水地がラムサール条約に登録されていることから、ラムサール条約の理念を根本に据えて進めていきたいと思っている。保全・再生、ワイズユース、交流・学習の 3 つが基本理念となっている。さらに他の事業との連携も考える必要があると思う。栃木南部地域では国営の土地改良事業が進んでいる。ネットワークとしてはそのような事業との連携が非常に重要と思っている。自然のネットワークも大事だが、人や事業のネットワークも進めていけたらと思っている。第 4 回検討部会以降、具体的な取組みが進んでいることになると思っているが、その意味でも今回の会議は橋渡しの役割を持つ重要なものになる。短い時間ではあるが積極的な発言をお願いしたい。

■議事 1：前回会議の意見について

※事務局より「資料 1」：前回会議の意見」の説明

■議事 2：関東地域におけるコウノトリ・トキを指標とした生態系ネットワーク形成基本計画の紹介

※事務局より「資料 2」：「エリア内で現在進行中の取組み事例について」の説明

■議事 2 についての質疑

(関係団体) 資料 2 の p5 で「自然関連計画の策定」の関係で「生物多様性とちぎ戦略」を 2011 年に策定し、現在は見直し作業を実施している。参考までに情報提供する。

(議長) このように大事なものが抜けている可能性があるので、各市町の皆さんも何かあればご指摘も含めてお願いしたい。

(有識者) 資料 2 の p7 にドジョウの分布図がある。実はこの範囲にはカラドジョウがかなり多い。その地点と一致している気がする。調査の際にドジョウとカラドジョウの区別をしているのか気になった。また、小山市の取組みでホンモロコの養殖があったが、ホンモロコは厳密には国内移入種であるため、水田の外に出て定着してしまう危険性がある。もし外に出ないための対策などを実施しているのであれば教えてほしい。また、移出しているかのチェック体制等について教えてほしい。

(オブザーバー) ドジョウ調査については、おそらく農政課で担当しているため、自然環境課では情報を持っていない。

(事務局) 詳細まではわからないが、一般の方にはドジョウとカラドジョウを厳密に区別するのは難しいと思う。そのため、この調査でも区別できていないのではないと思う。

(議長) 遊水地内で捕れたドジョウのほとんどはカラドジョウ。自治体で「農地・水」で調査した結果を聞いてもほとんどがカラドジョウと聞いている。遊水地の掘削地の調査ではすべてがカラドジョウであった。

(自治体) ホンモロコの養殖は 3 か所で行っており、そのうち 2 か所は水田の脇に設置している

が水田とは完全に分かれている。その水田ではふゆみずたんぼを実施している関係で子どもたちによる生き物調査を実施しているが、今のところホンモロコは確認されていない。直接担当している農政課からもそのような報告は受けていない。

(有識者) 2 か所の水田については、おそらく養殖池が排水路につながっていると思うので、その排水路や排水路の下流側にホンモロコが生息しているかどうかの調査を合わせて行うことが必要と思う。ホンモロコを使った地域活性化は素晴らしいと思うが、移出した結果、もともとそこに生息していた生きものがいなくなってしまう可能性もある。そのようなリスクを踏まえた対策・チェックを実施することも重要だと思う。

(有識者) **資料 2** の目標たたき台の保全・再生の短期目標について、最大の目標は採餌環境整備だと思う。昨年、遊水地にコウノトリが飛来したものの直ぐに移動してしまったのは餌が不足していたからだと考えている。目標に「コウノトリが一定期間滞在する」と書かれているが、もっと具体的な記載の方がよいのではないか。例えば、「良好な湿地環境を保全・再生し採餌環境整備を進める」などの表現で、明確に採餌環境について記載した方がよいと思った。また、到達目標については、トキ・コウノトリを普通種にするのは非常に難しいと思う。このような表現はやめた方がよいと思う。佐渡でのトキの野生復帰でもそのような表現はない。毎年放鳥を行ってやっと羽数を維持している状況。

(議長) 事務局で採餌環境について具体的に記載するようにお願いしたい。また、到達目標は普通種という表現について再検討してほしい。

本日はエリア内の市町にお越しいただき、取組みの紹介もさせていただいた。各市町から補足説明等を順番にお願いしたい。

(自治体) 取組みについては、特にハートランドプランという計画がある。夢のある保全・利活用、人材開発などを網羅した 10 年間を目処とした基本計画。できればそれを紹介してもらいたい。また、人材育成の部分でボランティア養成講座を実施し、実際に遊水地を案内してもらう渡良瀬ナイツクラブも立ち上がっているのも、そちらも紹介いただけたらありがたい。

(自治体) **資料 2** の p4 に動植物の生息に配慮した水辺環境の創出として、小山市ではふゆみずたんぼに取り組んでおり、現在は 9ha 実施している。また、多面的機能支払制度として年間 120 回ほどの生き物調査を子供たちと実施している。自然環境関連計画については、小山市でも平成 25 年 3 月に「生物多様性おやま行動計画」を策定している。これらを記載していただきたい。

(自治体) **資料 2** の p10 にホタル祭りがある。これは遊水地に隣接するのぎ水辺の楽校でのもので、地域のボランティア団体 50 名ほどにやっただいている。このほか、栃木県の事業ではあるが、「元気なもりづくり事業」も行っているほか、1 名の方ではあるが有機農業を 10ha 近くやっただいている。

(自治体) 自然環境関連計画の策定としては、現在、生物多様性地域戦略の策定に向けて検討・協議をしている。また、**資料 2** の p7 の自然観察会を兼ねた生物調査の実施については、市内の小学生との観察会の中で見つけられた生き物の記録を取っている。

(自治体) 久喜市では 3 つのテーマについて写真をもって取組紹介できるものが少ないと理解している。自然環境関連計画については、関連するものがないか改めて確認したい。

(自治体) 栃木市の方から遊水地のボランティアガイド養成講座の紹介があったが、板倉町の観光部局が連携させてもらっている。板倉町在住の受講生も多いと聞いており、今後色々な活動をしたいとも聞いているので、町としてもバックアップしていけたらと思っています。

る。

(自治体) 渡良瀬遊水地ボランティアガイド養成講座は小山市だけでなく、板倉町、加須市との連携で実施している。

(自治体) 遊水地を対象にはしていないが、各課で環境教育に取り組んでいる。生涯学習課では水辺の楽校ということで年 3、4 回ほど活動を実施している。その際には植物の観察など市内小学生と保護者を対象に募集・実施している。また、環境課では自然観察会を実施している。また、各小学校でもそれぞれ取り組んでいる。

(自治体) 結城市は遊水地と直接は接していないため、保全・再生、ワイズユースの取組みに貢献できなくて申し訳ないと思っているが、交流・学習として小山市と田んぼアート事業をさせてもらっている。また、3 月 18 日に遊水地の観光地化を進めるためのヨシ焼き見学サイクリングツアーへの参加を小山市からお声がけいただいた。結城市民に参加を呼び掛けたところ、多くの申し込みをいただいたと聞いている。結城市にはない自然環境を学ぶ機会の提供として取り組ませてもらうが、市内にも環境に興味がある方、学習機会を求めている方がいることを確認できたので、このような取組みが間違っていなかったと安心したところ。

(議長) コウノトリは鳥なので、良い環境があれば飛んでいくのでぜひ積極的にお願いしたい。

(自治体) 五霞町は遊水地に直接接していないため、遊水地の取組みはできていない状況。資料内に町の取組みもたくさん紹介してもらっているが、そのほか、ボランティア組織によるビオトープづくりがここ数年継続的に実施されている。今後、そのような取組みについても機会があれば紹介していきたいと考えている。

(議長) 遊水地の土でビオトープを造るという手法もある。

(自治体) 境町では環境保全型農業の実施と、土地改良区でのホタルの放流を紹介してもらっているが、遊水地から離れているため、具体的にどの取組みを紹介すべきか迷っている部分もある。今後この会議に参加する中で方向性が見えてくれば、皆と足並みをそろえて取り組んでいきたいと考えているので、よろしくをお願いしたい。

(議長) 遊水地から離れているという話が多く出たが、コウノトリは鳥なので飛んでいける。良い環境があれば飛来する。地道に農業などに取り組めば必ずつながる。そうすると関心も高まり、人的なつながりもできてくると思う。今取り組んでいることを引き続きお願いしたい。今後は、遊水地内だけでなく周辺の地域も含めて広い意味で考えていくことが、この会議の特徴と思っている。

(関係団体) 前回と変わってラムサール条約の基本理念に基づいたテーマになっており、地域全体の環境づくり・地域活性化が目標になっていると思う。一方で前回までコウノトリの採餌環境の評価を目標とするという話があったと思う。それから変更した背景を教えてください。

(事務局) **資料 3**で説明させていただきたい。

(議長) コウノトリ・トキについて目標の中に明確に一文入るように整理してほしい。

(関係団体) 古河市で 1990 年代に学校ビオトープを全部で 14 ほど造った。それらはすべて渡良瀬遊水地の土を使い、そこから何が芽生えるかを見ることで遊水地の貴重さを知ってもらうという目的で始まり、5 年ほど継続した。最近では古河第七小学校ではビオトープをリニューアルし、新しく池を造った。これからは植物だけでなく環境教育など、少し発展した内容を授業の中等で継続して実施してもらいたい。日常的に話をしていないといけないと思うので、各自治体でもお願いしたい。また、久喜市では埼玉県生態系保

護協会久喜支部がかなり頑張っているのです、そういうところと連携して先に進んでいってほしいと思う。

■議事 3：渡良瀬遊水地エリアの現状・課題について

※事務局より「資料 3」：「エリア内で展開するテーマプロジェクト（案）について」の説明

■議事 4：現在進行中のプログラム・メニュー例

※事務局より「資料 4」：多様な主体の連携による取組みの先行的事例について」の説明

■議事 3、4 についての質疑

（有識者）多様な主体の連携の先行事例については、最後のページを見て安心したが、地元の人が入ってこないとどうしても「多様な」とは言えないと思う。豊岡では水田を持っている農家さんがすごい。水田にどんな生き物がいて何をどのくらい食べているということを見ている。収穫はあまりなくても生き物がたくさんいる自慢の水田、と言える人が加わってくれば、とても多様になってくると思う。それを今後生態系協会がやってくれると思っている。野田市内には自分の水田を自慢に思う農家はいるのか。

（事務局）おっしゃる通りだと思う。野田市のコウノトリ放鳥拠点には第 3 セクターの農業生産法人があり、そこの方々は調査に参加してくれるなど、関心が高く協力的。それ以外のふゆみずたんぼを実施している農家は正直なところあまり関心がないと感じている。地域の方々と一緒に取り組むことで、意識を高めていくことが重要と考えている。また、豊岡については、コウノトリ放鳥前はコウノトリが田んぼに飛んで来たら石を投げて追い払うと言っていたそうだが、その後実際に田んぼに飛来するとすごく喜び、土地改良区の皆でお金を出しあって人工巣塔を設置したと聞いている。やはり、自分の水田にコウノトリが舞い降りることが意識変化のきっかけになったようだ。

（有識者）小山市でふゆみずたんぼ米を使用したお酒が造られているが、これは昔からある蔵元さんが造っているのか。昔からある蔵元さんのようなところと直結するとすごく面白いと思う。

（自治体）小山市は昔から酒造りが盛んな土地。思川や日光の伏流水を活用している。現在も 5 件の酒蔵があり、そのうちの 1 つの杉田酒造が造っている。評判は良いと思っている。

（有識者）お酒は豊岡に勝てると思う。

（事務局）「参考資料 1」の p40 にエリア内の酒蔵の名前を載せているので参考にしてほしい。今後これらも取り込んでいけたらと思っている。

（関係団体）河北潟では、生き物育む農法で作ったお米の袋に、生き物の絵を描いている。このお米がとれた田んぼにはこんな生き物がいる、ということが一般の方にもわかりやすくするのも面白いと思う。河北潟に行った際にそう思ったのでここで提案させていただく。

（関係団体）ふゆみずたんぼで色々な生き物がいたと聞いているが、例えば小山市でなつみずたんぼ、ふゆみずたんぼを実施するまでにどのように農家に了解を図ったのか。コウノトリやそのほかの生き物にとっては餌が非常に重要。渡良瀬遊水地内は良いが、その外ではなつみずたんぼ、ふゆみずたんぼのような取組みは非常に貴重なものだと思う。この取組みをやるには肥料や農薬など農法の全てが関わってくる。それをどう地域の方と話を進めたのか。それが共有できれば他の市町村も取り組みやすくなると思う。計画上はふゆみずたんぼに取り組むことになっていても、できていないのであれば、どうしてで

きないのか。またそれを乗り越えるためにはどうしたらよいのか。そういったことの参考にしたい。

(自治体) 渡良瀬遊水地がラムサール条約に登録されたことをきっかけに大きく 3 つの柱を打ち出し、コウノトリ・トキの野生復帰や環境保全型農業の推進を掲げている。そういった背景から、日頃から農家の皆さまなどに小山市の取組みの目的を話すように努め、会合でも積極的に説明するようにしている。そのような結果、最初は少なかったふゆみずたんぼの実施数も徐々に増加してきている。なつみずたんぼについても同様に、平成 27 年度から始めている。いずれコウノトリなどの鳥の餌場になることを理解してもらうために 1 件 1 件説明に回った。また、これらの取組みが実際にどのように役立っているのかを農家さんに知ってもらうため、実際に飛来したコウノトリの情報を積極的に発信するようにしている。なつみずたんぼも、NPO 法人オリザネットなどに協力してもらって野鳥調査を実施し、多くの野鳥が利用していることを市民の皆さまに実際に見て実感してもらうようにしている。

(有識者) 水田の調査をテーマプロジェクトにしているが、せっかく河川事務所が加わっているので、河川のワンドやたまりの生物調査と整備もできるとよいと思う。

(有識者) 水田に魚が生息するのは排水路や用水路から入ってくることによる。そのため、農業用排水路に魚が生息するポテンシャルがなくてはならない。可能であれば水路の調査をやっていただきたい。また、継続的な調査を何のためにやるのかを考えたときに、保全・再生にフィードバックができると思う。小山市で多面的機能支払交付金による生き物調査が精力的に行われているが、そのような結果を他の市町の結果と統合することでより面的な地域のポテンシャルを評価できると思う。あるいはどこを重点的に保全・再生していったらよいのか参考にできる。そのような仕組みができたらよいと考える。

(関係団体) 今までの調査は基本的に餌資源の調査。それらを利用する生き物の調査として、本当はコウノトリがよいと思うが、現状ではないので、例えばサギ類がどのような環境で何をどれくらい食べているのか、サギ類の個体数調査を実施してみてもよいのではないかと思う。

(有識者) 日本のトキ・コウノトリは水田に大きく依存している。本来は湿地の生き物で中国、ロシアのアムール川河口にたくさん生息しているが、そこは水田でなく湿地環境が広がっている。水田も重要だが、人工的な環境であり、農家への補償などを考えると財政的にもコストがかかる。渡良瀬遊水地のような湿地帯を餌場として整備していれば本当に素晴らしいと思う。前回も提案したが、餌場の多様性が必要。例えば夏場に水田の稲が伸びると水田で餌を採れなくなる。そのような時期に餌を採れる環境を遊水地で造ればよいと思う。考えとしては、モデル地域をつくり、着実に調査・結果とりまとめ・環境整備ができれば、コウノトリは自然に飛んでくると思う。短期ではなく、長期目標としてやっていただきたい。

(議長) 資料 3 の p8 でアクセスと回遊について書かれている。先ほどから遊水地と接していないという意見が出ているが、この考えが大切だと思っている。これについてご意見をいただきたい。

(関係団体) アクセスと回遊性の関係はテーマプロジェクトを見ると、コウノトリ・トキを指標とする部分よりも渡良瀬遊水地全体の将来のあり方を見るものだと思う。遊水地がラムサール条約に登録された時から問題になっているのがアクセスと回遊性。外部から来られる方は、遊水地は当然 1 つという前提で来られる。その中で遊水地に来る上で見落と

せない場所を回っていけるような回遊性を考えていかなければならない。その点から言うと、現状は例えば東北線で来て東北線で帰ろうという場合に公共交通機関を使った移動を提案できず、自ら車で送迎している。特に 2020 年に向けて日本遺産認定のための申請もしているが、仮に日本遺産に認定されてもアクセスが一番の課題になる。当然、エコロジカル・ネットワークを考えたときにもアクセスと回遊性が前提になると思うが、観光地としてとらえたときにも重要だと考えている。また、遊水地エリアの目標とテーマプロジェクトを見比べたときに気になったのは、取組みの優先性。保全・再生では 2020 年までにコウノトリ・トキが一定期間滞在、2030 年には通年滞在することが目標になっている。これは遊水地エリアだけでなく、関東地域で見てもかなりレベルの高い目標だと思う。その目標達成に一番大事なのは採餌環境づくり。テーマプロジェクトを見ると、それが生き物調査になっている。生き物調査もとても大事だが、採餌環境整備をして、その効果を確認するためのツールだと思う。調査だけをやっても環境がよくなるわけではない。農業では有機農法、河川では自然再生、ビオトープづくりなど、採餌環境整備メニューはかなりたくさんある。まずは採餌環境づくりを進めることを優先的な取組みとし、それを支える意味で生き物調査や環境教育を実施していくのがよいのではないかな。かなりの予算をつけて網羅的に実施できれば生き物調査も効果が出ると思うが、実際には難しいとなると、優先順位を考えた方がよいのではないかと感じた。

■議事 5：今後の展開・進め方について

※事務局より「資料 5」：今後の展開・進め方（案）」の説明

■議事 4、5 についての質疑

（関係団体）採餌環境が一番のテーマだと思っている。前回会議の資料を見ると、遊水地の餌量が豊岡と比べて非常に低い。遊水地外は小山市などで様々な取組みがなされている。その意味で、エリアのメインとなるべき遊水地内の採餌環境整備が重要と考えている。今後の予定にぜひ入れ込んでほしい。

（関係団体）小山市ではふゆみずたんぼやなつみずたんぼのように水を張った環境づくりをしている。先日のモニタリング委員会では、今後、利根川上流河川事務所で小山市域の遊水地で掘削による土壌攪乱場所を造ると聞いた。先ほどの有識者が話された多様な湿地環境に関連してだが、そのように水を張るだけではなく、ぐちゃぐちゃ状態の環境を休耕田に造ってもよいのではないかな。普通に水を張った田んぼとぐちゃぐちゃの田んぼで利用する生き物がどう変わるのかということ。昨年、小山市にソデグロヅルが飛来したが 2 日間で飛んで行った。その後、千葉を経由して蕪栗沼に移動し、ずっと居ついている。ソデグロヅルはぐちゃぐちゃしたところで採餌していた。採餌環境整備として休耕田を攪乱し、水がたまるところ、たまらないところを造ってみてもよいのではないかな。また、遊水地内にわたらせ未来基金として土壌攪乱場所を造ったが、そこにはニホンアカガエルの産卵が多くみられた。生き物によってはそのような環境が有効になることが分かってきた。ニホンアカガエルで考えるのであれば、近くに樹林環境がある場所に春先にぐちゃぐちゃな環境を造ってもよいと思う。アクセスについては、先日栃木市で行われた講演会で名執先生も「遊水地はアクセスが不便」と話していた。できるだけ早く、一般の人でも来られるようなアクセスの構築を検討してもらいたい。

(関係団体) 野鳥のために湿地環境が必要というのはわかるが、渡良瀬遊水地はヨシ原が評価されてラムサール条約に登録されている部分もあるので、掘削ばかりして全面的に池ばかりの環境にはしないほしい。ヨシ原という遊水地らしさは無くしてはいけない。どうしても掘削の話が中心になるが、そのバランスをお願いしたい。

(関係団体) 私も同意見。ヨシ原の中でも野鳥によって好む環境が違う。例えばオオセッカとコヨシキリでは全然違う。同じように、サギ類とコウノトリ、サンカノゴイでも違ってくる。渡良瀬遊水地の環境を変えていかなければいけないということだが、一番良いのはコウノトリも他の色々な生き物も棲める環境になること。去年の鳥学会で北海道の舞鶴遊水地でのタンチョウをシンボルにした取組みの紹介があり、ヨシ原が広がるとタンチョウが生息できなくなるという話をしていた。コウノトリでも同様なのか。

(有識者) タンチョウは渡良瀬遊水地でも生息できると思う。中国のタンチョウの生息地を見たことがあるが、ヨシ原が広がり、ところどころ水田のある環境であった。ヨシ原の形態の違いについてはよくわからないが、コウノトリについても大丈夫だと思う。

(有識者) これからの話になるが、主体は国交省ではなく皆さんだということを考慮するようにしないといけない。事務局が主体に見えてしまうことがあるが、そうならないように目に見える主体を作っていかなければならない。

(有識者) 前回も話したが、地域の面的な広がりを考えた取組みが重要だと思う。河川と渡良瀬遊水地、水田・水路があり、それぞれの管轄が国交省と農水省。農家・農村とどう絡めていくのが重要で、その方法の一つが多面的機能支払交付金事業。そういった協議会で農村の方々と連携を図っていくことが取組みの持続性につながるのではないかと考える。

■まとめ（議長より）

多岐に渡るご意見をありがとうございました。今後の展開については、本日のご意見を踏まえ、主体が見える形、優先順位をつける形など、しっかり今後で反映させていきたい。渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地であることから、保全・再生、ワイズユース、交流・学習の3本柱を念頭に置きながら、テーマプロジェクトを広域的に展開していければと思う。その中で例を挙げるとすると、遊水地内で掘削による多様な湿地環境が整備されている。遊水地外でも様々な取組みが進んでおり、栃木南部では土地改良事業が進み始めている。その中で水路やワンドを造る話が出てくる可能性もある。遊水地につながる水路もあるので、そういった事業地との連携も図りながら、遊水地エリア内でトキ・コウノトリもすすめる環境づくりを進め、地域振興にもつなげていけたらと思う。エリア内自治体には取組みを紹介してもらったが、それぞれが主体であることを認識し、積極的に取り組んでほしいと思うので、今後とも協力をお願いしたい。

■その他

- ・参考資料1、2の説明
- ・来年度について

来年度も検討部会、意見交換会、推進協議会を開催していきたいと考えているので、引き続き、ご協力をお願いしたい。次回の会議日程が決定し次第、事務局より連絡する。

以上